座談会

大学における親子関係

――教育、学生指導を保護者と共にどう展開するのか――

田澤（たざわ） 実（みのる）
法政大学キャリアデザイン学部准教授

祖父江（そぶえ） 健一（けんいち）
青山学院大学進路・就職センター進路・就職部長

親が過干渉という一方で、好きなことをやらせたいという声もある

兼高　大学生の親子関係について考えてみると、２０００年代に入って、入学式や卒業式に保護者が多数参加するようになりました。時を同じくして、大学のオープンキャンパスや進学相談会にも保護者が来場し、高校生よりも親のほうが質問をするケースが多くなった感じがします。さらには、就職の面接にも保護者が付き添うといったことが話題になりました。

　その理由をいろいろな大学関係者にうかがってみると、一つは戦後から現代にかけて親子関係が変化し、親が過干渉になったのではないかということ。また、大学進学率が上昇し、それまでは大学進学者がいな

2019年4月4日　日本私立大学連盟会議室にて

かった家庭から大学に入るようになったこと。あるいは、女子の進学率が特に上昇したため、女子学生の親が同行するようになったのではないかというように、さまざまな説が出ました。しかし、親が過干渉というわりには、オープンキャンパスなどで保護者の方々から「子どもが希望することをやらせたい」という声が聞こえます。

入学式・卒業式には父母や祖父母も参加、会場を分けたり2回開催も

兼高　本年の入学式では、保護者の同行をお断りした大学や学生1名につき2名までとした大学、何の制限もない大学、学生と保護者が入る会場を分けて同時中継した大学など、いろいろな対応が見られました。

このように、ある面では保護者の関わりを制限しつつ、一方では大学にとって大事なステークホルダーとして、後援会組織などに保護者の積極的な参加を期待している面もあります。大学は、親子関係の変化を踏まえた上で、保護者と協力しながら大学教育や学生指導の充実を図る必要があるでしょう。

本日の座談会では、大学における親子関係について、現状や課題、具体的な取り組みやその成果などをご紹介いただくとともに、保護者から大学教育への理解と積極的な支援をいただくにはどうすればいいか考える機会としたいと思います。

では、まず各大学の現状からご紹介ください。

内山　東海大学では、入学式と卒業式については保護者の参加に対する制限はありません。ただし、学生の席はフロア、保護者は観覧席と分けており、会場に入りきれなかった保護者には教室で式の模様を中継で見られるようにしています。父母や祖父母の方々もいらっしゃっており、子どもとの関係が強くなっていると感じます。

松木　専修大学は、数年前までは特に制限はありませんでした。しかし、昨年の卒業式から、会場である日本武道館の定員との兼ね合いと、安全重視の観点から学生1名につき2名までとさせていただきました。もっとも、遠方からおいでになった保護者の参加をお断りするわけにもいかないので、何とか工夫しているのが実情です。

田澤　私は数年前、学部の副主任として、入学式後に各学部へ来る新入生を迎える立場でした。学生の入学式になぜ保護者が来るのかといった意見もありますが、法政大学では入学式当日に新入生の父母・保証人向けのガイダンスを開催しました。

祖父江　青山学院大学では、学位授与式・入学式とも午前と午後の2部制として、分けて行っています。2回に分けても、出席者は1回に約5000名以上となります。現在、保護者の出席人数に制限はありませんが、会場となる青山学院記念館の安全性を考慮しますと、今後は出席人数の制限といった検討も出てくるかもしれません。

保護者向け説明会を入学式後に行う大学や5、6月に実施する大学

兼高　大学の入学式や卒業式に親が参加していいかという質問に対して、多くの大学で入学式の日に保護者向け説明会も開催しているから行っていいのだと答える人がいます。一方、大学側からすると、保護者が大勢いらっしゃるから説明会を開いているという事情もあります。専修大学でも、説明会を開いていらっしゃいますか。

松木　入学式後に開催し、それぞれの学部の学部長が自ら大学の教育方針を説明して、さらに保護者が関心のある資格取得などの支援体制について説明します。保護者向けの説明会といいつつも、新入生も一緒に聞くケースもあり、壁がなくなってきたように感じます。また、いまはインターネットからいろいろな情報が得られるとはいえ、やはり遠方からおいでになった保護者の方々にはいろいろな情報をお持ち帰りいただきたいとの考えから、保護者向けパンフレットなども作成して配付しています。

兼高　保護者からの質問内容に、変化はありますか。

松木　はい。ご自身も大学を卒業されている方が多くなったことから、具体的な内容を質問なさる保護者もいらっしゃいます。例えば、ある資格を取得するにはどの程度の学習時間が必要なのかといった質問も、最近は増えてきました。

兼高　それを聞いた保護者が、家に帰ってから学生にフィードバックするということでしょうか。

松木　二つ考えられると思います。一つは学費の負担や、学生がアルバイトをしなくて済むようにしたいとか、さまざまな観点から質問する。もう一つは、これまでの実績といった具体的なことです。

祖父江　本学では、新入生の保護者を対象にしたキャンパス見学会を、5月に相模原キャンパス、6月に青山キャンパスで開催しています。先輩の学生によるキャンパス見どころツアー、パイプオルガンコンサート、学生食堂で実際に食事をしてもらうなど、本学に親しみを持っていただくことを大切にしています。

また、2年生以上の保護者を対象に、学業、就職、留学、教職などに関する全体説明会及び個別相談会を、首都圏と地方で開催しています。首都圏在住の保護者には、5月と6月に青山キャンパスと相模原キャンパスで、昨年度は計4回開催しました。

地方在住の保護者対象の説明会は「ペアレンツウィークエンド」と称して、北は北海道から南は沖縄まで、これも昨年度は、6月と7月に計18回開催しました。学長をはじめ、副学長、学部長、各部の職員がチームを組んで出かけます。全体で4時間ほどのプログラムであり、昼食会を懇親会として、その県や市で活躍されている校友の方々をお招きし、保護者と本学卒業生との交流の場としています。

兼高　ペアレンツウィークエンドは、後援会に対する説明会とは別のものですか。

祖父江　ペアレンツウィークエンドは、大学後援会の事業活動の一環として、保護者と大学が連携を深める場であると同時に、その地方で暮らしていらっしゃる保護者の方々に、校友会がきちんとバックアップしますよ、というメッセージ発信の場ともなっています。私は進路・就職センターにいますのでよく分かるのですが、保護者の方々がとても安心なさる様子がよく伝わってきます。

地方在住の保護者のほとんどは、わが子が卒業したら帰ってきてほしいと願っています。しかし、学生はあまり帰りたがらない。地方は求人件数が多いわけでもなく、公務員か地方銀行くらいしかないのではないかと保護者が思っていたところへ、地元のしっかりした中堅企業で活躍なさっている本学の卒業生があって、その先輩方が保護者と交流する。そうすると、保護者もわが子を入学させて本当に良かった、勇気をいただいたと大変喜んでくれます。進路状況といった実績の数字ではなく、気持ちの面でプラスになっているようです。

兼高　新入生の保護者説明会は1回だけですが、ペアレンツウィークエンドは何回参加できるのでしょうか。

祖父江　何回でも大丈夫です。例えば愛知県のほうで参加し、その後に大阪でも参加される熱心な保護者もいらっしゃいます。また、首都圏の方が地方のペアレンツに参加もできますし、その逆も可能です。ただし、学生の成績表を用意する必要から、事前にお申し込みいただく形を取っています。

離れていると子どもの様子が分からず、アドバイスしていいのかどうか分からない

兼高　保護者に接して、どんなことをお感じになりますか。

祖父江　ジレンマといいますか、子どもの自主性に任せたいという一方で、やはり心配だから関わっていかなければ、という気

田澤 実氏

持ちもあり、保護者自身もどう接したらいいか分からないというのが本音ではないかと思います。実は私も愛知県出身でして、自分の両親がちょうどそんな感じでした。

松木 私も同感です。地方在住で子どもと離れていると、実態が分からない。どんなアドバイスをしたらいいのか、そもそもアドバイスをすべきなのかしないほうがいいのかと、日々心が動いているのではないかと推測します。

内山 本学では、地方の保護者でも学生の様子がある程度は分かるよう、出席状況や成績をWebで見られるようにしています。授業で出席を取り、入力していただいている授業に限られますが。

祖父江 健一氏

兼高 たしかに、保護者はお子さんの出席状況を意外に心配されているようです。

内山 入学式の後には、学生と保護者に対して学修や就職の説明をするガイダンスを行っています。さらに、各地の地区後援会と大学とで、5月には大学の近況報告を実施しています。これには職員が出向きます。また、50年ほど前から、9月には教員がグループを組んで全国を回り、就職についての講演や、学生個々の成績や就職について、保護者との個人面談を行ってます。

わが子の学習や将来が心配だけれど、それを子どもとどう話し合ったらいいか分からないという保護者の参加もあるようです。

兼高 青山学院大学では1学年4500名のうち、1都3県以外からの学生が約1000名とうかがっていますが、東海大学ではいかがでしょうか。

内山 本学は付属高校が全国にあり、そこから進学してくる学生も多くいますが、個人面談に参加する保護者が多いとは言えません。

保護者が、より具体的に大学の後方支援をする関係に変わりつつある

兼高 保護者との関わりを通じて、最近変わってきたことはございますか。

内山 保護者がおっしゃることはあまり変わっていないと思います。ただ、インターネットも含めて事前にかなり調べていらっしゃるようで、就職先や資格、奨学金といった具体的な質問や要望が増えてきた気がします。

兼高 地方の国公立大学や一部の私立大学では、大学生協が新入生向けの説明会を開催し、学費や生活費、アパートのことなど、生活面の説明もしているようです。

松木　特に地方の保護者は、東京での生活費を気になさるようです。

本学にも、専修大学育友会という後援会組織があります。保護者から、大学の状況を説明してもらえる機会はないかとの要望があり、そのための組織として全国の大学に先駆けて昭和33年に育友会が生まれました。当初は全国4カ所での懇談会開催でしたが、次第に保護者の組織が機能するようになり、現在では67の支部があります。

毎年夏休みに各地で支部懇談会が開催され、教職員が手分けして出向き、単位取得の問題や就職、健康管理、奨学金、学生生活など、全ての情報を提供します。当然、個別面談の時間も設けて対応しています。

松木 健一氏

また、育友会が本学の学生サービスを紹介する小冊子を作成するとともに、学生の活動を伝える会報を年4回発行し、全会員に送付しています。

さらに、育友会も大学と一緒に学生支援を行いたいということから、修学環境の向上や困窮状態にある学生のための奨学金をはじめ、さまざまな支援活動が広がっています。こうした活動を60年以上も続けてきたため、大学からはさまざまな情報を提供し、大学と保護者が一緒になって学生を育成しようという精神が確立しています。育友会の憲章にも、本学のビジョンである「社会知性の開発」を推進するために専修大学を支援するとあります。

内山 秀一氏

兼高　「本学はこういう教育をしているからご協力ください」という関係から、保護者がより具体的に大学の後方支援をする関係に変わりつつあるといえるでしょうか。

松木　ええ、そう思います。伝統的に、保護者と大学の関係は非常に近いと感じます。

入り口の段階で情報過多のために進路選択が難しくなって保護者が関わる

兼高　田澤先生はキャリア支援などがご専門ですが、これまでのお話をどのようにお聞きになりましたか。

兼高 聖雄氏

田澤　5年や10年単位の変化を考えるのか、学生の父母世代が大学生だった頃と比較するのかによって議論の展開が少し違ってくるとは思いますが、5～10年単位で振り返ってみると、ポイントは、オープンキャンパスから既に保護者が参加するようになったことです。

いま、どの大学でもオープンキャンパスが盛況になり、予約が必要なところまであります。また、高校の進路指導でもオープンキャンパスに行くよう勧めています。

オープンキャンパスでは、以前は大学生が高校生に説明していましたが、保護者の増加に伴って、説明自体が保護者向けになってきたことが特徴の一つかもしれません。つまり、入学時から保護者が一緒というよりも、入学前から保護者との関わりが見られるというのが、この5～10年の変化ではないでしょうか。

入り口の問題か出口の問題かによっても議論が異なると思います。入り口については30年単位の変化になりますが、先ほどお話に出た大学進学率の上昇。四年制大学に限定しても50％を超えてユニバーサル化しており、大学進学は「権利」というよりも一種の「義務」のような状況です。

さらに、入り口の段階では三つの要因があると思います。まず入試経路の多様化。私大の入学者の半分以上が一般入試以外の入試を経由しています。次に、大学数です。例えば1990年代には大学数が500前後だったものが、現在は約780と1・5倍近くに増えました。特に私立大学が多様化してきました。

そして地味ながら影響しているのは、大学の学部名の多くが、文学部や法学部といった伝統的な漢字の名称ではなく、分かりにくくなっていることです。調べたところ、全国の大学で学部の名称が511種類あるうち、300以上は「唯一学部」、つまりその学部名がほかでは使われていません。いわゆる「カタカナ学部」などがあります。受験生も保護者も、その学部で何を学ぶかが学部名だけでは分かりにくくなっている可能性があります。

兼高　高校生やその保護者において、進路選択が難しくなっているということですか。

田澤　入り口の段階で、情報過多になっていると思います。

オープンキャンパスに保護者が参加するのは特別なことではなく、日常的な流れになった

田澤　出口については、ご存じのように求人倍率の推移です。私は2001年度卒ですが、2000年3月に求人倍率が1倍を下回ったほどの大変な時期でした。ちょうどその頃に生まれた子どもが、いま大学に入ってきています。大変な体験をしてきた親世代が、わが子の就職を心配するということもあるのかもしれません。

2008年頃に、大学生の保護者向けの就職情報誌が非常に売れて話題になりました。その後、保護者向けガイダンスを開く大学が増加しました。

兼高　保護者が経験したことのない就職活動を、子どもがするということですね。

田澤　大学生の保護者層は幅広く、バブル期の前後で事情は異なりますが、少なくとも自分たちの頃とはだいぶ様子が違うということはかなり感じているようです。2000年がインターネット就活元年なので、いまの保護者はそれを経験していません。

志望先に応募ハガキを送って、返事が返ってくるのを待つ時代は終わりました。

自分の時とはだいぶ違う、どう話したらいいのかという葛藤が一つの要因になっている。これが、5～10年ではなく、もっと長いスパンにおける変化です。

兼高　確かに、入り口の問題と出口の問題はかなり違う気がします。特に、オープンキャンパスに保護者が参加することに対して、大学は未だに十分に対応できていないのではないでしょうか。

内山　高校生は来ないで、親だけがオープンキャンパスに参加する姿も散見されます。

祖父江　本学のオープンキャンパスは青山と相模原で7月と8月に4回行われ、参加者は合計3万2000人くらい。キャンパスが高校生と保護者であふれんばかりです。保護者と高校生の割合は1対1もしくは2対1で、やはり母親が多いようですね。

松木　本学でも、次第に保護者が増えてきました。逆に保護者のほうが、一度見たほうがいいということで子どもを連れてきたとおっしゃるのを聞くこともあります。

高校の先生がオープンキャンパスに行くよう促す、それも複数校に行きなさい、2年生のうちから行きなさいというように。また、地方の高校が修学旅行の際に貸切バスで来学してキャンパスを見学していくこともあります。これは個別対応になります。

いまはインターネットでいろいろな情報が手に入るし、親も子も受け取る情報は基本的に同じです。われわれとしては、保護者の参加が増えるのはもう特別なことではなく、日常的な流れだと判断しています。

オープンキャンパスや保護者向け説明会では、学生が話すほうが伝わりやすい

兼高　高校の進路指導の先生は、なぜ親にもオープンキャンパスに参加するようにと話すのでしょうか。

田澤　まず、先ほどお話しした入試経路の多様化があるのかもしれません。本来は、どの入試方法であろうと大学を知ることは大事であって、大学のことを分かってから一般入試を受験してほしい。実際はそうではないケースのほうが圧倒的に多いわけですが、少なくとも推薦入試の生徒には「オープンキャンパスに参加し、この大学のここがいいと思って志望した」と答えられるよう指導しているのかもしれません。

ところが、高校の低学年の生徒がたくさん参加するようになった。大学からすると、関心を持ってもらったことはうれしいものの、なぜ来たのかがいまひとつ分からない。私ももう少し調べてみたいと思います。

兼高　ただ、私立大学としては、学費を出していただくのは保護者であり、保護者の決定のほうが大きいという気もしますが。

祖父江　本学のオープンキャンパスは、いまは学生が中心となってキャンパスガイド・ボランティアとして対応しています。職員は裏方です。職員が話すよりも、実際に学んでいる先輩の学生が自らの体験を通して直接話したほうが、情報がしっかり伝わるということが次第に分かってきました。われわれが話すと、保護者はどうしても「本当のところは、どうなのだろうか」といったところがあると思いますが、学生が話すことにより、大学と保護者の距離が近くなるといいますか。

最近、保護者の大学に対する期待は相当なものがあるとプレッシャーを感じていま

す。保護者がわが子に対して、過保護とか過干渉をすればするほど、大学にも相応の責任を求めてきていると感じます。

田澤　本学でも、学生のオープンキャンパススタッフから説明を受けた高校生が、結果的にそれがよかったから入学し、自分もオープンキャンパススタッフになるという連鎖が生まれています。

内山　オープンキャンパスでは、どの大学も同じだと思いますが、学生が実体験に基づいて高校生や保護者に話す形式で情報提供が行われていると思います。

祖父江　同じ意味で、「ペアレンツウィークエンド」では、在学生の視点から丁寧な説明を心掛けています。特に地方の保護者は、就活や学生生活について、より深く知りたいというご要望が強く、それに対して、校友会の卒業生も加わり一緒にお話をすることによって、保護者は大学に対する親近感がわき、共感していただけるのだと思います。

松木　大学の学びなどは教職員が説明しますが、普段どんな勉強をしているか、学生生活はどうかといった具体的な話は、やはり高校生も保護者も学生本人から聞いて確認したい、実態を知りたいという気持ちがあるでしょう。

一方、どんな教員がいるか知りたいとか、あの先生の模擬授業を受けたいといった希望もあり、そういう意味ではオープンキャンパスは総合的なイベントだと思います。教職員と学生が一緒になってオープンキャンパスに取り組んでいる姿を見ていただくとともに、学生が図書館や各種施設を案内したり、学習で使っている自分のパソコンを見せる。そんなところまでご覧いただく時代になりましたね。

説明している学生に、来学した保護者がわが子の姿を重ねて考える

兼高　自分の子どもがどんなところで学び、どのような学生生活をするのか知りたい、見たいという欲求がどんどん強くなっているのでしょうか。

松木　そうですね。オープンキャンパスで大学の雰囲気まで実感として分かった上でお帰りになっているようです。

兼高　そうすると、東海大学のように出席状況や成績をＷｅｂで見ることができるという仕組みは、保護者に強くアピールするでしょうね。

内山　ただ、実際にご覧になる方が非常に多いとはいえない状況でもあります。

田澤　見ることができるのは、Ｗｅｂだけですか。本学では郵送もありますが。

内山　両方やっていて、Ｗｅｂではいつでも見ることができ、年に２回は成績表を郵送します。

オープンキャンパスに来学した保護者が、説明している学生にわが子の姿を重ねて考

えて、ああいう大学生になってほしいと感じるようであれば、大学のこともよく伝わるのではないかと思います。

兼高　かつて、関東の大学はオープンキャンパスで教員が前面に立つことが多く、関西の大学のほうが学生に任せる部分が大きいと思っていましたが、そうではなくなってきているのですね。

祖父江　そうですね。学生にとっても、スタッフとしてオープンキャンパスに関わることは非常にメリットがあると思います。大学で推進しているボランティア活動に汗水流して取り組むことは、充実した学生時代を過ごすことにつながります。就活のエントリーシートに書くことがたくさんあっていいじゃないかと学生には話しています。

就職活動における学生と保護者、大学の関わり方

兼高　次に、出口に関する学生と保護者の関係についてうかがいたいと思います。

祖父江　保護者の多くは、口を出し過ぎると子どもが嫌がるし、あまりよくないことだと理解はしています。しかし、就活がなかなかうまくいかないと、途中から急に干渉しだして、結果、悪循環に陥るケースが多いようです。こんな時こそ、大学が学生と保護者をどうサポートしていくのか、一番大事なところです。電話の対応で終わらせるのではなく、保護者に進路・就職センターまでご来室いただき、部・課長が直接に顔を合わせてお話をうかがい、時間をかけて丁寧な対応を心掛けています。

兼高　学生の就職活動について、事前に保護者向けの説明会を開くことはありますか。

祖父江　首都圏・地方のペアレンツの中で行っています。説明ポイントは三つです。一つは、先ほど田澤先生がおっしゃった学生と保護者の世代間ギャップを知らせること。次に、就活生の保護者に対する気持ちを知らせること。最後に、保護者に学生の就活中の気持ちの変化を知らせることです。

ガイダンスの中で、データに基づく就職活動の現状説明はスムーズに理解していただけるのですが、結局のところ、最後は親子間のコミュニケーションの問題になります。親がどれほど心配しているか、逆に、就職活動がどれほど大変であり、学生がどれほど不安を抱きながら就活を行っているかという互いの気持ちについて、ガイダンスでは丁寧に説明しています。

松木　就職の問題は非常に重要です。保護者に対しては、育友会による夏の保護者向け懇談会に就職担当者も必ず派遣します。

就職指導の対象は、高学年の学生だけではなく、キャリア教育の観点から低学年から始めていいわけであって、学生にもそうしたことを意識させるよう、早めに情報を提供していく姿勢が大事だと思っています。

内山　就職活動をしている学生とその保護者の間に入るというのは、大変だけれど必要かもしれません。学生にはキャリア科目などを通して意識付けをし、キャリア形成のベースをつくるとともに、その過程で保護者とも情報を共有するよう促します。

兼高　学生に対して、親とも話すように伝えるのですね。

内山　そうしながら就職活動に臨む態勢を整えることも必要かもしれません。

田澤　法政大学キャリアセンターのWebサイトには、かなり前から「保護者の方へ」というコーナーがあり、Q&Aには「親が

子どもの代行をしないように」といったことが載っています。ということは、保護者がキャリアセンターのページまで見ているということです。

保護者は子どもと会話しているつもりでも、子どもはそれを会話と思っていない

田澤　就職活動の時期の学生と保護者のコミュニケーションで難しいと思うのは、保護者は子どもと会話しているつもりでも、子どものほうではそれを会話と思っていない場合があることです。

保護者が学生の就職活動に関心を持つこと自体が就職活動にプラスの影響を与えるということが、幾つかの研究で明らかになっています。さらにわれわれの研究で分かったのは、保護者が関心を持つだけではなく、その関わり方に学生が満足しているかどうかが大事だということです。

では、どうすれば満足かというと、学生が主体的に話すということ。「聞かれたから話す」のでは、あまり満足ではありません。保護者が「これだけ関心を持って、励まして、会話している」と思っていても、学生は「分かっているから言わないでほしい」と。先輩から厳しいことを言われるのはいいけれど、親からは言われたくないと思っています。会話があるといっても、このように受け取り方の差があり得ます。特に、学生から保護者を見たときに、ですね。

兼高　保護者のほうは会話をしていると思っていても、学生からすると言われるだけで、何も情報を共有していないという状況があるということですね。

田澤　そうした認識のずれが起きている可能性があります。

もうひとつ気になっているのは、地域差の問題です。就職活動そのものが地域差の影響を受けますが、先ほど出た、保護者は帰ってきてほしい、学生は帰りたくないというケース。地元や大学の所在地から離れたいという学生と地元に帰りたい学生では、保護者との関わり方が少し異なることが明らかになってきました。つまり、地元に残る学生と保護者の関わり方がやや独特というか、相談する関係とはいえないかもしれないということです。保護者が、おまえはここにいるからいいだろうといった「抱え込み」をしていないかどうか。

もちろん、学生が希望して保護者も賛同しているのであれば何ともいえませんが、大学側としては、地元と三大都市圏の両方を見て考える機会を学生に与えたいという気がします。そのバランスを学生と保護者にどう説明するかは難しいと思います。

兼高　正社員・契約社員の問題でも、よくそれが生じます。希望する就職先からは、まず契約社員として採用し、9月に第二新卒という形で正社員にすると言われる。そうすると親が反対して、そこで就職活動が止まってしまうというケースをよく見ます。

田澤　内定を出した学生の親に企業が連絡して確認をする「オヤカク」という言葉があります。実施している企業はまだそれほど多くはありませんが、企業がそこまで考えなければならないのでしょうか。

祖父江　進路・就職センターに10回以上相談に来室した学生でも、最終的に就職先を相談する相手は、やはり親なんですね。何回も親身に進路相談にのってきた職員ではなくて。しかし、それはむしろ好ましいことだと思います。

保護者からの不安に応えて、就職ガイダンスを低学年から開始

祖父江　先ほどお話が出ました、保護者への就職支援。本学では、これまでガイダンスの対象は3年生の保護者でしたが、今年度からは2・3年生へと拡充しました。社会状況の変化に対して、心配されている保護者に大学としての説明が求められていると感じています。とはいえ、就職は学生自身の人生の問題ですので、そこは留意しつつ、保護者の期待にも応えることが大切ではないかと考えています。

社会のグローバル化に伴って、企業はいっそう通年採用へと移行してきています。実質的な選考がインターンシップの段階から始まっているいま、早くからの就職活動を意識せざるを得ません。世界的に見れば、日本の採用活動・就職活動はガラパゴス状態であり、社会から大学の教育が期待され、求められる人材を輩出するためにも、大学には新たな取り組みが求められています。こうした状況を大学がどう認識し、今後どうあるべきかが問われているということを非常に感じています。

兼高　大学の考えを保護者に理解していただきつつ、強い学生を育てる大学に変わっていかなければならないわけですね。教学にしろ就職指導にしろ、保護者の力が当然必要になるので、大学はそういった活動にも取り組まなければならないと思います。

祖父江　実際のところは、世論がこうだから、他の大学がやっているからという後手の対応になっているのが、多くの大学の現状ではないでしょうか。しかし、最近は新しい取り組みも見られるようになりました。例えば、従来、障害のある学生は、個人情報保護の下に、就職支援に必要な個人情報が就職部にほとんど伝えられていませんでした。しかし、本学においても2018年度に障がい学生支援センターが開設され、コーディネーターと情報をやりとりできるようになり、就職支援に活用できるようになりました。こういった新しい取り組みは、他大学でも始まっているのではないでしょうか。

松木　そうですね。障害のある学生自身が了承しているのであれば、就職の求人元にそうした情報を伝えて話を進めることはあります。就職というのは、非常に複雑な要素がたくさんあります。

兼高　障害のある学生の場合は、就職もそうですが、日頃の対応はいかがでしょうか。

松木　教室における対応も同様です。情報が伝わっているほうが、教員も対応しやすいということがあります。

内山　窓口対応しつつ、保護者ともお話をする。それは、入学前から始めています。

祖父江　障害のある学生に対する学習支援

を、健常者の学生が自主的にボランティアとして行っています。

兼高　それは就職指導というよりも、人材育成というか、教学のお話ですね。

祖父江　ええ。田澤先生がおっしゃったように、入口と出口がきちんとつながっていなければいけないと思います。要は、充実した学生生活を送ることが最も大切であり、教学のプロセスがしっかりしていると、学生自身が納得できる進路を選択できるようになる。その仕組みを大学がいかに設定できるかということではないでしょうか。

兼高　そうですね。保護者はかなり具体的に知りたがっていると思います。それを伝えながら、保護者と共にどう展開したらいいか。やはり、情報量ということになるのかもしれません。

学生の主体性を、親も含めた周囲が認めてサポートできるかどうか

田澤　お話をうかがっていて思ったのは、学生が困ったときに、いまよりももっと大学に相談するようになれば、一部の保護者が大学に対して過干渉的に何かを要求するようなケースは減るかもしれないということです。保護者が、自分の時とは全然違うために抱く不安は、時代背景を説明すれば少しは解消する可能性があります。さらに、学生が困ったときにもっと自分から相談に行くようになれば、保護者は、うちの子は何かあっても自分できちんと道を切り開いていけると思うでしょう。まさに親子関係につながっています。

法政大学の場合は、この学生はこういう障害があるから配慮を願いますという連絡を学生相談室から受けることが、２０１８年度から増えたように感じます。差別解消法の影響、もしくは高校までそうした支援を受けてきた学生がたくさん入学してきたなどの理由があると思います。障害に限らず、多様な学生を受け入れて、出口の就職のところでもきちんと対応してもらえるのであれば、不安だという保護者もある程度納得するかもしれません。

松木　現実的には、まだ対応しきれない部分もありますが、さまざまな人が一緒に学ぶのがキャンパスであり、自立に向けて頑張っている学生が周囲に大きな影響を与える。そういった環境をどうつくるかがキャンパスの重要なテーマだと思います。共生社会といいますか、学生が互いにサポートし合い、教職員も率先して取り組むようになれば、就職のあり方や学生の将来デザインもおのずと変わるのではないでしょうか。

兼高　先行者を見せることが、ほかの学生をインスパイアしモチベーションを上げる重要な要因になるということでしょうか。

内山　それもありますし、そのアクションを学生が起こせるかどうか、その主体性を親も含めた周囲が認めてサポートできるかどうかだと思います。いまの学生の主体性の出し方や表現の仕方は以前とはかなり変わってきた部分があるということを、親も教職員も理解する必要があります。

祖父江　主体性の表し方が変わってきたことを、どの辺に感じていらっしゃいますか。

内山　私は大学で女子サッカー部の指導もしていますが、スポーツをしている学生は表現することが比較的上手だと思います。自分たちが得意とするフィールドで、それぞれが協力しながら競争している。ある意味で一つの社会がそこに形成されており、

互いの特長や欠点を認め合いながらやっているところに主体性が生まれ、各自の存在価値があることを理解しています。それに対して、集団に入れない学生の主体性の表し方というのは、例えばネット上だったりするのかもしれません。

集団の中で人と関わることは先ほどの共生にも通じるし、就職活動や保護者とのコミュニケーションにもつながるでしょう。それをわれわれも分かっていないと、学生をどう理解していいか分からなくなります。社会は変化し、個人的には、学生との年齢差は広がり、学生の表現の仕方も変わっていくので、把握する方法をこれからも模索していかなくてはならないと感じています。

兼高　それが新しい親子関係にもつながる。

内山　はい。アクティブ・ラーニングやPBLといった教育手法において、複数人で課題に関わるというところもキーになってくるのではないかと感じます。

学生が持っているものを上手に育てて、将来の道筋を提示する

祖父江　お話をうかがいながら、そもそも保護者は大学入学の目的をどこに置いているのか、いま考えています。わが子をどこに向かって進ませればよいのか、保護者は非常に悩んでいて、一方、大学側も悩んでいる。学生本人も含めて、三つ巴で悩んでいる状態ではないでしょうか。

グローバル化の波の中で、今後、採用形態は多様化していきます。一律に就職に向かわせるのではなく、大学の「深く多様な学び」の中で、人間性がより育まれ、学生と保護者が納得する進路につながるのだと思います。これまで積み上げてきた日本独特のガラパゴス的なものを大切にしつつ、グローバルな世界に向き合っていくほうが、一見、遠回りのように見えて、実は現実的ではないかと思います。

兼高　世界から何が評価されるか、実は日本人自身が一番分かっていないのかもしれません。クールといわれて、初めて気が付いたりしています。これまでの議論からすると、学生が持っているものをいかに上手に育て上げるか、その道筋を提示することがまず大事だという気がしてきました。

祖父江　ただし、学生が多様化しているのは事実だと思います。

兼高　それに応じて、いろいろなレールを明確に提示し、しっかり歩ませることが大学の本当の役割です。その目的をいかに保護者と共有できるかが大事でしょう。

松木　それは保護者も賛成すると思います。先ほど地方の問題がありましたが、地元の会社に就職しても、アジアの進出先へ転勤ということも考えられ、1カ所にとどまるとは限りません。この20～30年で、かつての大企業がなくなったり新しい企業が生まれたりと、企業や社会の構造が大きく変わっています。その中でどんな将来を目指すべきかという学生の問いに対しては、やはり学生自身がどんな仕事をしたいかというところに着目せざるを得ません。

学生の将来デザインといっても、描ける部分と描けない部分があり、われわれは現実的なところでやっていくしかないでしょう。しかし、例えば東南アジアを訪れると、優秀な人材の確保は万国共通の問題です。英語が十分にできなくても、何としてもコミュニケーションを成立させようという意志があれば採用するという企業もあります。

日本で不採用だった人が向こうに行って採用になるケースもあるほどなので、われわれが認識できない部分もあるようです。

そのために学生はどんな準備をすべきかというと、いろいろな社会を見てほしいと思います。その一つがインターンシップですが、インターンシップの内容がいま問われています。日本で通用するだけではなく、諸外国と競争できるように、学生の意識改革をしていくのがわれわれの課題ではないかと考えます。

大学はどんな選択肢を与えられるか、本質的に何を提供できるかが重要

田澤　先ほどの共生とつながるような気がします。多様な背景を持つ人と主体的に関われるようにするには、インターンシップでもいいし、学内外を問わず、その大学が提供するさまざまな活動の中でそうした力を育んでいってもいいでしょう。海外で働く、あるいは海外から日本に来た人たちと一緒に仕事をする場合に、そうやって身に付けた基礎力が問われると思います。

インターンシップもただ参加すればいいわけではなく、参加してうまくいった人とそうでない人が出てきて、やはり学ぶ事が大事だという話になる。では大学はどんな選択肢を与えることできるのか、本質的に何を提供できるかが重要だと思いました。

祖父江　私もそう思います。就活のための大学ではないわけであって、やはり学業や課外活動にベストを尽くす、それがあって初めて出口につながります。保護者は大手の企業に行ってほしいと言ってはいますが、自分の子どもが納得して進路を選択した上で就職することが一番大切だというのが、共通した親の願いだと思います。

兼高　大学に入ったらちゃんと学校へ行って勉強して、いい友達と付き合ってくれるのが一番だと保護者も思っているでしょう。

祖父江　ええ。やはり、大学はきちんとした学びこそが大事です。そこに保護者の考えを巻き込むことは必要ですが、現状では大学側のほうが巻き込まれているように思われます。このままいくと出口がなくなってしまうのではないか。私立大学はいまこそ建学の理念に立ち返る必要があります。就活を意識したインターンシップに参加するよりも、充実した学生生活を送るほうが大事ではないでしょうか。

内山　本学のチャレンジセンターでは、社会的な活動も含めて、学生自身が企画した活動を推進しています。しかし、そこに参加するような学生は大丈夫であって、そうではない学生にどうやって力を付けさせるかが問題です。大学なのでしっかり学ぶことは当然ですが、一方で、親は子どもに好きなことをして欲しいと言う。以前は高校でしたが、いまは大学では好きなことをやれと。では就職はどうするかという段になって、状況が変わっていく感じがします。

兼高　大学は就職のためにあるのではなく、こういうことのためにあると明確に示せば、保護者の理解を得られて後援活動も活発になるでしょう。

保護者とともに展開する、大学のファンになっていただく

兼高　田澤先生は、家族心理学的にどうご覧になっていらっしゃいますか。

田澤　保護者を蚊帳の外に置くのではなく、ビジョンと方向性を示して納得していただく

ければいいのですが、違う方向性もあるのではないかと言われたときは、対話するしかないと思います。まずこちらから、何を考えているのか伝えていいのではないでしょうか。大学が、そこに関わろうとすることです。

祖父江　その元になるのは、やはり私立大学の建学の精神ではないでしょうか。保護者には大学の理念にご賛同いただき、いわゆるステークホルダーとしてのご支援・ご協力へとつながるのではないかと思います。

兼高　それには何が必要でしょうか。

内山　本来はそういうことを分かった上で入学してほしいと思うものの、入学後に改めて保護者に説明するなどの働きかけをしなくてはいけないというのが現状でしょう。

松木　入学時点で学生や保護者が大学の方針などをご理解いただいているかというと難しい面があるので、それを教育の中に取り込んで伝えていく。創立１４０周年を迎える本学の成り立ちや歩みを、ＤＶＤによって紹介したり、教員が解説するなど授業に取り込んでいます。

私学としては、そういう機会を提供することも大事です。併せて、これらの情報や大学の現状を保護者に説明する機会も、毎年夏に設けています。こうした活動が大学をご理解いただくベースになって、保護者とのコミュニケーションも、受身になるのではなく、積極的に働きかけていく。そういう試みを続けるべきだと思います。

祖父江　青山学院には、幼稚園から初・中・高等部が設置されていますが、内部から進学してきた学生の保護者は、学院の教育理念を深くご理解いただいているように感じています。そういう意味で、いま入学生の確保という面から、どの大学でも付属学校を設置していますが、それ以上に、教育の理念に共感していただく保護者を、大学へのファンとしてとらえるといいのではないでしょうか。

兼高　単なる教育活動だけではなく、高大連携の面もあります。

松木　保護者に向けた情報発信では、育友会と共に「蒼翼の獅子たち（学校をつくろう）」という小説を刊行しました。本学創立の物語であり、保護者からは大学に対する理解が深まったとか、次はこんなことをやりましょうといった声が寄せられました。大学をご理解いただくことの重要性と、そのための情報発信は消極的であってはならないということを体験的に学びました。保護者自身が感銘すると、学生のため大学のために自分も一緒にやりたいとおっしゃっていただけるので、そうした気持ちがないと大学と保護者がつながりません。

祖父江　何よりも、ファンになっていただくことが大切だと思います。

松木　おっしゃるとおりです。大学の理解者になっていただきたい。

祖父江　校友会こそ、母校の熱いファンそのものです。就職の面でも、校友会による就職支援委員会の先輩方が、手弁当で在学生の模擬面接をしてくださっています。毎回の打ち合わせは非常に熱気がこもっていて、メンバーも最近は若い校友が増えています。本当に感謝です。

兼高　保護者に大学のファンになっていただけばいいということが分かり、大学論まで多岐にわたる議論を通して、保護者との関係づくりについて理解が深まったように思います。本日はありがとうございました。